ＯＣＧのカードでラッシュデュエルやってみた。

サイアー

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

タイトル通りです。

注）

■特殊召喚はあまりしません。

■エクストラデッキも使いません。

■ソリティアも多分しません。

■作者は持っているカード以外あまり知りませんので変なカード使っていても、何も言わないでください。

それでもいいというかたはどうぞ。

目次

ＯＣＧのカードでラッシュデュエルやってみた。――――――――1
２体の竜対機械仕掛けの竜――――――12
悪魔対光子竜――――――――24
光のロードを突き進め――――――――37
習得せよ儀式召喚!!サイバースマジシャン登場!!――――――――51
デュエル・アカデミア　伝説の巨人65
弱さは罪!?奪われたカードを奪還せよ!!――――――――78

ＯＣＧのカードでラッシュデュエルやってみた。

■ソリティアはあまりしません。
■特殊召喚もあまりしません。
■エクストラデッキも使いません。

それでもいいという人は見てください。

俺口調の少年　ライフ８０００
手札４
僕口調の少年　ライフ８０００
手札４
「俺のターンドロー。俺はサイバースウィザードを召喚。俺はこれでターンエンド。」
サイバース・ウィザード
レベル４
サイバース族／効果

攻撃１８００
白一式の服装で未来的な格好をした少年があらわれた。
「手札事故かな？僕のターンドロー。僕はイグザリオン・ユニバースと復讐の女戦士ローズを召喚。」
イグザリオン・ユニバース
レベル４
獣戦士族／効果
攻撃１８００
復讐の女戦士ローズ
レベル４
戦士族
攻撃１６００
いきなり二体のモンスターが現れた。
バトルフェイズ
「僕は魔法カード鈍重を発動。対象はサイバース・ウィザード。」
サイバース・ウィザード
攻撃１８００－８００＝１０００

サイバース・ウィザードが重力のようなものを受けて攻撃力が下がった。

「行け！イグザリオン・ユニバースでサイバース・ウィザードを攻撃。」

「不味い！」

サイバース・ウィザードにイグザリオン・ユニバースが体当たりをし、そのままプレイヤーに突撃した。

サイバース・ウィザードを破壊。

ライフ８０００－８００＝７２００

「いてて、でもまだまだ。」

「更にローズでダイレクトアタック。ローズは戦闘ダメージを与えた時しらに３００のダメージを与える。」

ローズも体当たりをしてきて、ついでにという感じで持っていた剣を投げつけてきた。

「……」

ライフ７２００－１６００－３００＝５３００

「メイン２カードを１枚伏せてターンエンド。」

「俺のターンドロー、俺はビットロンを２体召喚。そして、ビットロン２体をリリースして現れろ銀河眼の光子竜（ギャラクシーアイズ・フォトン・ドラゴン）をアドバンス召喚。」

ビットロン
レベル２
サイバース族／通常
攻撃力２００

銀河眼の光子竜
レベル８
ドラゴン族／効果
攻撃３０００

現れたのは１体の竜その眼には銀河が写っていた。

バトルフェイズ

「行け！フォトン・ドラゴン、女戦士ローズを攻撃。破滅のフォトン・ストリーム!!」
「ギャー!!」
復讐の女戦士ローズ破壊。
３０００－１６００＝１４００のダメージ
８０００－１４００＝６６００

「俺はこれでターンエンド。」
「僕のターンドロー。!!きたよ！僕のエースモンスター。」
「何?!」
「僕は、聖杯に誘われし者とカードガンナーを召喚そして、この2体をリリースして現れよ機械の体を得た、ドラゴン、クラッキングドラゴン!!」
旅人風の男とゲーセンの機械みたいなモンスターが現れたかと思うとその上からその二体を踏み潰して機械仕掛けのドラゴンが現れた。

聖杯に誘われし者
レベル４

戦士族／通常
攻撃１８００
カードガンナー
レベル３
機械族／効果
攻撃４０００
クラッキングドラゴン
レベル８
機械族／効果
攻撃３０００

「やっかいだな。」
クラッキング・ドラゴンはモンスターを出す度にそのモンスターの攻撃力をそのモンスターのレベル×２００下げその数値分相手にダメージを与える効果がある。
バトルフェイズ
「クラッキング・ドラゴンでフォトン・ドラゴンを攻撃。してもフォトン・ドラゴンの効

果で除外されてしまうからね。僕はこれでターンエンド。」

「こうなったらやけくそだ。俺のターンドロー!!俺は団結の力をフォトン・ドラゴンに装備。このカードは装備モンスターの攻撃力を自分の場のモンスター×８００上げる。場にいるのはフォトン・ドラゴンのみよって攻撃力は３８００となる。」

フォトン・ドラゴン

攻撃３０００＋８００＝３８００

アタックフェイズ

「フォトン・ドラゴンでクラッキング・ドラゴンを攻撃。」

「クラッキング・ドラゴンはこのモンスターのレベル以下のモンスターには破壊されない。」

「だがダメージは受ける。」

３８００－３０００＝８００

８０００－８００＝７２００

「俺はこれでターンエンド。」

「僕のターンドロー、僕はカードを1枚伏せてサブマリンロイドを召喚。そしてサブマ

リンロイドに伏せていた装備魔法デーモンの斧を装備する。これによりサブマリンロイドの攻撃力は１０００上がる。」

サブマリンロイド
レベル４
機械族／効果
攻撃力８００

マリンロイド
８００＋１０００＝１８００

バトルフェイズ
「行け！サブマリンロイドプレイヤーにダイレクトアタック。」

ライフ８０００－１８００＝６２００
「僕はこれでターンエンド。（さっき伏せたカードは聖なるバリアミラーフォース。仮にこの状況を覆されてもこのカードで何とかなるかな。）」

「俺のターンドロー、魔法カードサイクロンを発動。俺は真ん中の伏せカードを破壊するぜ。」
「ミラーフォースが破壊された！」
ミラフォは割られるかなり有名な話だ。
「俺はランチャー・コマンダーを召喚。」
ランチャー・コマンダー
レベル４
サイバース族
攻撃１７００
何か物騒なモンスターが現れた。
「クラッキング・ドラゴンの効果発動。召喚、特殊召喚されたモンスターの効果発動。」
サイバース・コマンダー
攻撃力１７００－８００＝９００
ライフ６２００－８００＝５４００
「俺はサイバース・コマンダーの効果発動。このカードをリリースしてクラッキング・ドラゴンを破壊する。」

「え!?」

クラッキング・ドラゴン破壊

「俺は更に、クラインアント、ライドロンを召喚。更にクライアントの効果自分の場のサイバース族の攻撃力を５００あげる。更に場のモンスターの数が増えたのでフォトン・ドラゴンの攻撃力も上がる。」

機械仕掛けのアリと獅子が現れた。

こんなの有りか？

クラインアント
レベル３
サイバース族
攻撃力１５００→２０００
ライドロン
レベル４
サイバース族
攻撃力２０００→２５００

銀河眼の光子竜
攻撃力３０００＋８００×３＝５４００
バトルフェイズ
「クラインアントでマリンロイドを攻撃。」
サブマリンロイド破壊
「フォトン・ドラゴンとライドロンでプレイヤーにダイレクトアタック。」
６２００－５４００－２５００＝０
勝者　俺口調の男

２体の竜対機械仕掛けの竜

『デュエル終了。感想を後日提出せよ。』

「いやー、やってやったぜ！」

「負けたよ。まさかクラッキング・ドラゴンがあんな簡単に破壊されるとはね。」

デュエルが終わり二人の男性が感想を言い合っていた。　勝った方はデュエルアカデミアに通う男子高校生１年生の佐藤　遊光（さとう　ゆうこう）

負けた方は遊海　達也（ゆうかい　たつや）同じくデュエルアカデミアの１年生だ。

「にしても面白いな。ラッシュデュエル。通常召喚何回も出来るから光子竜が簡単に出せるな。」

「そうだね僕もクラッキング・ドラゴンがこのルールだととても頼りになるね。」

今日はラッシュデュエルの実習だ。

このデュエルアカデミアではＯＣＧのカードでラッシュデュエルをしていこうという珍しい学校なのだ。

「いやあれはかなり強い。」

「まぁね。」
　そう、このルールだとＯＣＧよりも簡単にクラッキング・ドラゴンを出せるようになったので。
「達也君ちょっとこっち来てくれない。」
　達也が困った様子の先生に呼ばれた。
「はい、なんですか？」
「実は今日生徒が一人休んでしまってね。すまないけどもう一戦いいかい？」
「いいですよ。じゃあ遊光、またあとでね。」
「おうまたな。」

　先生に呼ばれデュエルスペースにつくと一人の女子生徒がいた。
「おんたが対戦相手？遅すぎなんじゃないの？」
「いいや、僕は代わりだよ。僕はもう１回デュエルをしているからね。」
「あっそうなの、それはごめんなさい。」
「いやいいよ。気にしてないから。」

「それで手加減はしないわ。」
「それは僕もだよ。」
「あ、自己紹介をするのを忘れてたわね。私の名前は佐藤　京子（さとう　きょうこ）よ、よろしく。」
「僕の名前は遊海　達也よろしく。」
　お互いに緊迫感を感じていると二人が同時に
「「デュエル!!」」

「私のターンドロー、霊廟の守護者を召喚そして霊廟の守護者はモンスター２体をリリース素材に出来る霊廟の守護者をリリースして真紅眼の黒龍（レッドアイズ・ブラック・ドラゴン）をアドバンス召喚。」
　霊廟の守護者
　守備力２１００
　真紅眼の黒龍
　レベル７
　攻撃２４００
　通常のデュエルだと通常召喚が１回なので霊廟の守護者は使いずらいのだがラッ

シュデュエルだと強力なリリース要因となった。
「いきなり最上級モンスター!!」
「それだけじゃない。私は更に霊廟の守護者をもう一体を召喚。そのまま２体分リリースして、青眼の白龍（ブルーアイズ・ホワイト・ドラゴン）を召喚。」
黒い竜が現れたあと隣にデュエルモンスターの中でも有名なドラゴンが、２体並び立った。
青眼の白龍
レベル８
攻撃３０００
黒い竜と白い竜の二体が並び立つ。
その威圧がフィールドを包み込んだ。
「ブルーアイズとレッドアイズが並ぶことなんて中々見ない光景だよな。」
「まぁね。更に私は黒炎談を発動。レッドアイズの攻撃力分つまり２４００のダメージを相手に与える。」
黒い竜が口から炎の塊を勇騎に向かって放った。
「いきなり!!」
達也残りライフ

８０００－２４００＝５６００
「私はこれでターンエンド。」

このターンで手札が０枚になったが次のターンでまた５枚ドロー出来るのだから問題はない。
「僕のターンドロー、カードを２枚伏せて僕はハック・ワームと速攻のかかしを出してその２体をリリースして現れろクラッキング・ドラゴンをアドバンス召喚。」

ハック・ワーム
レベル１
攻撃４００
速攻のかかし
レベル１
攻撃０
クラッキング・ドラゴン
攻撃３０００
前の話でも出てきた機械仕掛けの竜。

「あんたもドラゴン使いってそれ機械族じゃないの!?」

「そうだけどそれがどうかしたの？」
「私はドラゴンが大好きなのよ。そんな偽物の竜は私は認めないはスクラップにしてやるわ。」
「そうするとスクラップ・ドラゴンになりそうだね。」
「それも機械族じゃないの。もう容赦しないわ、覚悟しなさい。」
「お好きにどうぞ。」
　バトルフェイズ
「それじゃあクラッキング・ドラゴンでレッドアイズを攻撃。」
「カウンタートラップ発動、攻撃の無力化。攻撃を無効にするわ。」
「ターンエンド。」

「私のターンドロー、ははは、やっぱりデュエルモンスターズ最強はドラゴン族ね。魔法カードサイクロンを発動。あんたの真ん中の伏せカードを破壊するわ。」
「ドラゴン関係ないと思うけど。」
「そうね。魔法カード、封じられし聖槍を発動。これによりあんたのクラッキング・ドラゴン攻撃力を８００下げる。これであんたの相棒はレッドアイズすら勝てないもう私の勝ちは確定ね。」

「だからドラゴン関係無いじゃん。」
クラッキング・ドラゴン
攻撃力３０００－８００＝２２００
「まだよ魔法カード一騎加勢、ブルーアイズの攻撃力を１５００上げるわ。」
青眼の白龍
攻撃３０００→４５００
バトルフェイズ
「行きなさいブルーアイズでクラッキング・ドラゴンを攻撃。」
青眼の白龍
攻撃力４５００
「トラップ発動。魔法の筒、効果ブルーアイズの攻撃を無効にしてブルーアイズの攻撃力分相手にダメージを与える。」
「え、そんなー！」
ライフ８０００－４５００＝３５００
「これが僕の戦術だよ。相手の展開や攻撃を利用してダメージを与える戦術だよ。」
「くっ、でもまだよ。まだ私にはレッドアイズがいるレッドアイズでクラッキング・ドラゴンを攻撃。」

そう前の話ではあまりうまく回らなかったが本来このデッキはクラッキング・ドラゴンや魔法の筒などのバーン戦術を得意としたデッキだったのだ。

クラッキング・ドラゴン対真紅眼の黒龍

２４００－２２００＝２００ダメージ

達也

残りライフ

５６００－２００＝５４００

「だけどクラッキング・ドラゴンは自分以下のレベルのモンスターには戦闘では破壊されない。」

「何よそれ！ターンエンドよ。」

「僕のターンドロー、カードを1枚伏せる、そしてジャック・ワイバーンを召喚。」

ジャック・ワイバーン

レベル４

攻撃１８００

小さいクラッキング・ドラゴンが現れた。

「また機械族、あんたどれだけ偽物のドラゴンを出せばきかますむのよ。」
「満足するまでだ。魔法カードリミッター解除を発動。」
「り、リミッター解除!?」

リミッター解除、それは機械族のデッキ最強の魔法カードその効果は自分の場の機械族の攻撃を倍にするという能力だ。

クラッキング・ドラゴン
攻撃３０００→６０００
ジャック・ワイバーン
攻撃１８００→３６００
バドルフェイズ

「クラッキング・ドラゴンでブルーアイズを攻撃。」
６０００－３０００＝３０００
ライフ３５００－３０００＝５００
青眼の白龍破壊
「ブルーアイズが破壊された。それでも墓地の霊廟の守護者の効果発動。場のドラゴン

族が破壊された時に発動できる。墓地のこのカードを特殊召喚することが出来る。そして破壊されたモンスターが通常モンスターなら手札に戻す。青眼の白龍を手札に戻すわ。…でもあまり意味は無いわね。」

霊廟の守護者
守備力２１００

「ジャック・ワイバーンでレッドアイズを攻撃。」

ジャック・ワイバーン対真紅眼の黒龍
３６００－２４００＝１４００ダメージ
ライフ５００－１４００＝－９００
勝者　遊海　達也

「負けたわ、ラッシュデュエルでのデュエルっていうのも中々面白いわね。」
「まぁ僕も楽しかったよありがとう。」
「こちらこそ。」

硬い握手を結んだ。
「おおー男の友情みたいだな。」
近くで見ていた遊光がそんなことを言ったら、
「わ、私はれっきとした女子よ。」
「いや、わかってるよ。」
「ほんとに分かったんでしょうねって、あんた遊光じゃない。はやくドラゴンデッキ組みなさいよ。」
「いやだよ。」
「知り合い？」
「まぁな。俺が光子竜を持っていたからな。あいつかなりのドラゴン好きだからな。」
あれは入学式をしてすぐの話だ。
遊光が近くのカードショップでデュエルをした時、銀河眼の光子竜を呼び出したら以上な反応をしてからたまに会うときに話をするようになったのだ。
「いい加減サイバース族じゃなくて別のデッキ作りなさいよ。」
「まぁそのうちな。」
「そう言って作らなかったじゃないの。」
「まぁまぁとりあえず落ち着いて。」

お互いにヒートアップしていたところを達也がなだめる。

数分後

「だとしても今のところエクストラデッキ無しでサイバース族はきついわよ。」

「そうだなぁ。これからカードショップ行って何かないか探してみるか。」

「じゃあ僕もいくよ。」

「私も行くわよ。どうせ暇だし。」

悪魔対光子竜

「さあ、きたわよ。さっそく新しいデッキをくもうじゃないの。」
「いいカードがあったらな。」
　カードショップに来たのだが、遊光はあまり期待していない。何せ本来はＯＣＧで成り立つカードが多いのが普通だ。しかも最近のカードはかなり展開力があまりいらないルールなのでデッキに入るカードは大分異なるのだ。
「あ、これなんてどう?ぶつかり合う魂!これとパワーコード・トーカーと合わせれば結構強いと思うわ。」
「リンクモンスター使えないから無理。」
「あ、そうだった。」
「まだルールに馴れて無いんだろ。」
「まだって、２週間たってんだよ。馴れて無いじゃすまないぞ。」
「くっ、バレちゃったかーアハハ。冗談だよ、冗談。」
「「(ぜってー冗談じゃないだろ。)」」

数分後

ラッシュデュエルで使えそうなカードを何枚か探してみると以外と何枚かあった。

「探してみるものだな。」

「そうだね。」

買ったカードをデッキを組み直していると、

「やぁ君達、近くのデュエルアカデミアの生徒さん達だよね。」

いきなり後ろから声をかけられた。

急いで振り向くとそこにはこのお店のエプロンを着た少し高い身長の３０代後半っぽい男性がいた。

「は、はい。あなたは？」

「あぁ自己紹介をしていなかったね。私はこのお店の店長だよ。ちょっとそこの君ちょっと頼みたいことがあるんだけどいいかな？」

店長を名乗る人が遊光に何か頼みたいことがあるようだ。別に断る理由は無い遊光は、

「え、えぇといいですよ。」

「すまないねぇ、新しいデュエルコートの試運転したくてねぇ一人じゃできないから是非とも強力して欲しかったんだよ。」

「ということは対戦は店長さんですか?」

「いや、私は機械の監視だよ。君とデュエルしてもらうのはうちのバイトの一人だよ。あ、そこにいる子ね。おーい柏木くん。あれやるからお願い。」

「分かりました店長。ルールはラッシュデュエルでしたよね。」

「そうだよ。お願いね。」

「分かりました。あ、君が対戦相手かな。その制服は1年か。俺は、柏木　勝（かしわぎしょう）。君達と同じ学校の一つ上の先輩だよ。」

「よろしくお願いします。」

デュエルフィールドのシステムを起動させて対戦相手と向き合い、声を揃えて、

二人「「デュエル!!」」

遊光

ライフ８０００

勝

ライフ８０００

「俺のターンドロー俺はサイバースウィザードとＲＡＭクラウダーを召喚してそのまま２体をリリースして銀河の目の光子竜とアドバンス召喚。カードを１枚伏せてターンエンド。」

サイバースウィザード
レベル４
サイバース族
攻撃１８００

ＲＡＭクラウダー
レベル４
サイバース族
攻撃１８００

銀河の目の光子竜

レベル８
ドラゴン族
攻撃３０００

「光子竜か、しかもサイバースと混ぜているのか、珍しいデッキを使うんだな。俺のターンドロー、俺はにトーチ・ゴーレムを相手フィールドに特殊召喚してこちらの場にトークンを２体特殊召喚する。
トーチ・ゴーレム
レベル８
悪魔族
攻撃３０００
トーチトークン
レベル１
悪魔族
攻撃０

「トーチ・ゴーレム?なんで相手フィールドに攻撃力３０００のモンスターを特殊召喚!?」

なんでだ?リンク召喚は使えないのにトーチ・ゴーレムを使っている一体どうして。

「バトル行け、トーチトークンでトーチ・ゴーレムを攻撃。」

「攻撃力０のモンスターで攻撃力３０００のトーチ・ゴーレムを攻撃!?何をするつもり?」

トーチトークンがトーチ・ゴーレムに突撃すると、トーチ・ゴーレムが拳で対抗してトーチトークンが破壊された。

トーチトークン対トーチ・ゴーレム

攻撃０　　対攻撃３０００

３０００－０＝３０００のダメージ

「ぐはぁ。だがこれで発動条件は整った。速攻魔法、ヘルテンペスト発動。これによりお互いのデッキのモンスターは全て除外だ！」

残りライフ５０００

「へ、ヘルテンペスト!?」

ヘルテンペスト

それはいくつものコンボデッキで使われてきたコンボカード。その発動条件の高さからあまり使われていないカードだがその能力はすさまじくお互いのデッキと墓地のモンスターを全て除外するというものだ。
遊光と勝のデッキと墓地のカードが光ったかと思うとモンスターカードが飛び出てフィールドの中央に向かっていった。

「俺のデッキが。」
遊光　残りデッキ残り１５枚
「大丈夫だよデュエルが終わったら演出では消えたけとデュエルが終わったら戻ってくるから。俺はこれでターンエンド。さぁどこからでもかかってくるがいい。」
勝　残りデッキ２０枚　残りライフ５０００

「ヤバいかもね。デッキのモンスターが無いってことはモンスターを何度も召喚できるラッシュデュエルでモンスターを出せないのはかなりの痛手だね。」
「感心してるんじゃないのよ。て言うかとんでもないデッキね。相手に何もさせる気が

無いんじゃないの？」
「そうだね。彼はこのショップのバイトの中でもかなりの実力者だよ。さあてこれをどう返して来るのか楽しみだよ。」
外野は冷静に戦況を把握していたのだった。

「俺のターンドロー!!俺は、ビットロンを召喚。そのままバトルビットロンでトークンに攻撃。」
ビットロン
レベル２
攻撃　１５００

ビットロン対トーチトークン
攻撃１５００　　攻撃０
１５００－０＝１５００のダメージ
「破壊される。だがそれだけでは俺は倒せないぞ。」
残りライフ３５００

「俺は、光子竜でダイレクトアタック!!」
「ぐはぁー」
残りライフ５００
「トーチゴーレムで止めだ！」
「トラップ発動。ドレインシールド攻撃を無効にしてトーチゴーレムの攻撃力分回復する。」
残りライフ３５００
「俺は、これでターンエンド。」
残りライフ８０００

「俺のターンドロー、俺は、お前の場の光子竜とビットロンをリリースして溶岩魔神　ラヴァ・ゴーレムを特殊召喚！」
「しまった！」
光子竜とビットロンの上から溶岩が落ちてきてそのまま2体を飲み込んで1体の巨

大なモンスターになった。
「更に俺は、魔法カード所有者の印これによりお前の場のトーチ・ゴーレムとラヴァ・ゴーレムは俺の元に戻ってくる。」
「何!?」
さっきまで遊光の場にいた2体のゴーレムが謎の印を見ると勝の場に戻っていく。
「バトル、いけラヴァ・ゴーレムとトーチ・ゴーレム一斉攻撃!」
溶岩魔神ラヴァ・ゴーレム
攻撃３０００
トーチ・ゴーレム
攻撃３０００
８０００−３０００−３０００＝２０００
「ぐはぁー!」
残りライフ２０００
「俺は、これでターンエンド。越えられるか?この壁を。」

「攻撃力３０００が2体ね。」

「まだ余裕じゃない。サンダーボルトとか使えば逆転できるわよ。」
「そんな都合よく引けてるわけないだろ。制限カードだろあれ。」
「だったら攻撃力で突破すれば」
「遊光のデッキには３０００を越えるモンスターは入ってないよ。」
「じゃあ積みなんじゃあないの？」
「いいや、よく見てなよ。これから大逆転するから」
「仲間の勝利を信じて戦う、イヤー青春だね。」

「越えてみせますよ。俺のターンドロー、俺は死者蘇生を発動。墓地からよみがえろ！ビットロン！」
　ビットロン
　攻撃１５００
「ここでビットロン光子竜じゃなくていいのか？」
「えぇ大丈夫ですよ。バトル入るときに更に魔法カード」
「えっと何でそんなカードを？」

「ビットロンでトーチ・ゴーレムを攻撃。」
「攻撃力の低いトーチ・ゴーレムで攻撃だと!?」
「ダメステいいですか?」
「え?オネストはありえないし、え、何?ど、どうぞ。」
「俺は、速攻魔法　Ａｉ打ちを発動。」
「Ａｉ打ち?」
「Ａｉ打ちとはまさしくお互いのモンスターの攻撃力を同じにして相討ちさせる。そしてお互いにそのモンスターの元々の攻撃力分のダメージを与える。」
「はい!?」
　ビットロンにトーチ・ゴーレムが殴ろうとするとビットロンが大爆発してトーチ・ゴーレムも巻き込まれた。
「グハァー!!」
　勝残りライフ５００
「俺はこれでターンエンド。これで俺の勝ちだ。」
　遊光残りライフ５００

「え、遊光それってどういうこと？」
京子がどういうことか分からずにいたが、その以外のメンバーは理解していた。

「ラヴァ・ゴーレムはスタンバイフェイズに１０００のダメージを受ける。よって俺の敗けだ。」
ライフ０

「ありがとうおかげでこのデッキの弱点を改めて確認することが出来たよ。」
「いえ、こちらこそ。楽しかったです。」
「にしてもＡｉ打ちか、驚いたよあれは＠イグニスター専用カードだと思っていたよ。」
「ありがとういいデータがとれたよ。お礼に君達にカードをあげよう。」
「いいんですか、店長！」
「君には何も無いよ。」
「それはないっすよ、店長。」
「アハハハ」

光のロードを突き進め

「本日もラッシュデュエルの研修を行う。今回も、レポート提出してもらうからな。それでは始め!!」

先生の号令から始まった今回の授業前にもあったラッシュデュエルの実習だ。学校でデュエルを楽しめるからいいのだけど。

さてここで一つの問題が発生している。それは、

「(どうしよう僕は人見知りなんだよ。)」

そうなのだ、遊海は普段はこういう授業では遊光と組んでデュエルをしているのだが、今日は、京子と一緒にデュエルをしに行ってしまった。

「あのーデュエルの相手います?」

遊海が一人でどうしようか悩んでいると後ろから女子生徒に声をかけられた。

「え、あ、はい、大丈夫ですよ。」

「あ、じゃあ私とやりませんか?」

「いいですよ。僕の名前は遊海　達也です。」

「私は佐藤　麻衣です。それでは始めましょう。」

「「決闘!!」」
「私のターンドロー、私は手札からライトロード・アサシン　ライデン、ライトロード・マジシャン　ライラを召喚します。」
ライトロード・アサシン　ライデン
レベル４
攻撃力１７００
ライトロード・マジシャン　ライラ
レベル４
攻撃力１７００
「私はフィールド魔法ジャスティスワールドを発動します。このカードは私のデッキからカードが墓地に送られる度にシャインカウンターが１つ乗っかり、１つにつき攻撃力＋１００上げます。」
フィールドに立派な神殿が現れた
「更にライデンの効果デッキ２枚を墓地に送りその中にモンスターがあれば攻撃力を２００上げる。カードが墓地に送られたことでシャインカウンターが１つ乗ります。それによって私の場の［ライトロード］と名のついたモンスターの攻撃力が１００上がる。」

墓地に送られたカード
ソーラー・エクスチェンジ
ライトロード・ハンター　ライコウ
ジャスティスワールド
シャインカウンター
０↓1
ライトロード・アサシン　ライデン
攻撃力１７００↓２０００
ライトロード・マジシャン　ライラ
攻撃力１７００↓１８００
「ターン終了時、ライラの効果デッキの上から2枚、ライデンの効果デッキから3枚を墓地に送る。カードが2回墓地に送られたことによってシャインカウンターが2つ乗るね。」
墓地に送られたカード
裁きの龍
ライトロード・エンジェル　ケルビム
ジャスティスワールド

ライトロード・モンク　エイリン
底なし落とし穴

ジャスティスワールド
シャインカウンター
1↓2↓3
ライトロード・アサシン　ライデン
攻撃力2000↓1800↓1900↓2000
ライトロード・マジシャン　ライラ
攻撃力1800↓1900↓2000

「（時間をかければ攻撃力がとんでもなくなるな。）僕のターンドロー僕はカードガンナー、ツインバレル・ドラゴンを召喚、ツインバレルの効果、コイントスを2回行い、2回とも表なら相手のカード1枚破壊。対処はジャスティスワールドを選択するよ。」
コイントス結果
1回目　表

２回目　裏

ガチャガチャのようなモンスターと鼻と口が銃のようになっているモンスターが現れた。

「ハズレちゃいましたね。」

「まぁ、想定の範囲内だよ。カードガンナーの効果デッキの上から3枚を墓地に送り、攻撃力を１５００上げる。」

墓地に送られたカード

機皇帝　ワイゼル∞

サイバーフェニックス

重力砲

「そして2体リリースしてクラッキング・ドラゴンをアドバンス召喚。」

フィールドの2体を犠牲にして機械仕掛けの竜が現れた。

バトルフェイズ

「行け!!クラッキング・ドラゴンをライデンを攻撃。」

クラッキング・ドラゴン対ライトロード・アサシン・ライデン

攻撃力３０００―２０００＝１０００ダメージ
８０００―１０００＝７０００
「ターンエンド。」

「私のターンドロー私は手札からソーラー・エクスチェンジを発動。手札のライトロード・サモナー　ルミナスを捨てて２枚ドローその後デッキから２枚を墓地に。ジャスティスワールドの効果で更に攻撃力を増加。更にシャインカウンターが１つ乗る」
墓地に送られたカード
ライトロード・ドラゴン　グラニス
貪欲なツボ
ジャスティスワールド
シャインカウンター
３→４
「（来た！）私は永続魔法ライトロードの神域を発動。手札のジャスティスワールドを捨ててライトロード・ドラゴン・グラゴニスを手札にくわえる。更にライトロード・マジシャン・ライラを生贄にライトロード・ドラゴン・グラゴニスをアドバンス召喚。」

ライトロード・ドラゴン　グラゴニス
レベル６
攻撃力２０００
「レベル６で攻撃力２０００?低くない。」
「そう思う?
ライトロード・ドラゴン　グラゴニスは墓地のライトロードの種類×３００上がる。更にジャスティスワールドのシャインカウンターは４つよって攻撃力は４００上げるわ。」
ライトロード・ドラゴン　グラゴニス
攻撃力２０００→３８００→４２００
「攻撃力は高いだけどクラッキング・ドラゴンの効果、相手のフィールドに召喚されたモンスターのレベル×２００攻撃力を下げその数値分相手にダメージを与える。」
ライトロード・ドラゴン　グラニス
攻撃力４２００→３０００
残りライフ７０００→５８００
「だったら装備魔法デーモンの斧をグラゴニスに装備これによりグラゴニスの攻撃力は１０００上がりクラッキング・ドラゴンを超えたよ。」

ライトロード・ドラゴン　グラゴニス
攻撃力３０００↓４０００
バトルフェイズ
「グラゴニスでクラッキング・ドラゴンを攻撃。」
ライトロード・ドラゴン　グラゴニス対クラッキング・ドラゴン
４０００－３０００＝１０００ダメージ
残りライフ８０００↓７０００
「ターン終了時グラゴニスの効果デッキから３枚を墓地に。」
墓地に送られたカード
ライトロード・スピリット　シャイア
ライトロードの神域
聖なるバリアミラーフォース
「墓地に送られたカードの中にライトロードがあり攻撃力が３００更にジャスティスワールドにシャインカウンターが乗ったことで更に攻撃力増加。」
ジャスティスワールド
シャインカウンター
４↓５

ライトロード・ドラゴン　グラゴニス
攻撃力４０００→４３００→４４００

「僕のターンドロー。僕は手札から魔法カードカップ・オブ・エースを発動。君か僕のどちらかの手札を増やすよ。」
「それって実質デメリットが無いですよね。ラッシュデュエルだと。」
そうなのだこのカップ・オブ・エースはコイントスをして表だったら発動したプレイヤーが裏だったら相手が2枚ドローするカードなのだがこのカード何とラッシュデュエルだとデメリットがないのだ。次のターンになれば相手は5枚になるようドローする。よってドローしたとしても次のターンのドローで5枚になるので意味が無いのだ。
コイントス結果
裏
「コイントスは裏か。君が2枚引きな。」
「ええ。ドロー。」
「カードを2枚伏せて、僕は更に装備魔法重力砲をクラッキングドラゴンに装備する。その効果でクラッキング・ドラゴンの攻撃力を４００上げる。」

クラッキングドラゴン
攻撃力３４００
バトルフェイズ
「行け!!クラッキング・ドラゴン、ライトロード・ドラゴン　グラゴニスを攻撃。重力砲の効果バトルを行うモンスターの能力を無効にする。よってグラゴニスの攻撃力は元に戻り破壊出来る。」
「と、トラップ発動攻撃の無力化攻撃を無効にしてバトルフェイズを強制終了するよ。」
「僕はこれでターンエンド。」
「私のターンドロー私は魔法カードサイクロンを発動重力砲を破壊するわ。」
「私はライトロード・マジシャン　ライラを召喚。」
クラッキングドラゴンの効果発動ライラのレベルは４よって相手に８００下げて８００ダメージを喰らえ。
ライトロード・マジシャン　ライラ
攻撃力１７００→９００
残りライフ５８００→５０００
「ライラの効果ライラを守備表示にしてその伏せカードを破壊するよ。」
「魔法の筒が。」

魔法の筒は割られるそれは当然のことだ。

「これで妨害の可能性は低くなったね。更に魔法カード、月の書を発動。クラッキング・ドラゴンを裏守備表示にするよ。」

「!!しまった。」

「更に魔法カードソーラー・エクスチェンジ発動。手札のライトロード・ハンター　ライコウを捨てて2枚ドローしてデッキから2枚墓地に送るよ。」

墓地に送られたカード

ライトロード・レイピア

ライトロード・アーチャー　フェリス

「墓地に送られたライトロード・レイピアの効果、このカードがデッキから墓地に送られた時私の場のライトロードモンスターに装備出来る。グラゴニスに装備。更に墓地のライトロードの種類が増えたことによって攻撃力が増加。ジャスティスワールドとライトロードの神域にシャインカウンターが乗るよ。」

ジャスティスワールド

シャインカウンター

5→6

ライトロードの神域

シャインカウンター
1↓2
グラゴニス攻撃力４４００↓５１００↓５４００↓５５００
バトルフェイズ
「グラゴニスでクラッキング・ドラゴンを攻撃!!」
「でもクラッキング・ドラゴンはこのカードのレベル以下のモンスターとの戦闘では破壊されない。しかもクラッキングドラゴンは守備表示だからダメージも無いから無駄だよ。」
「普通ならねでもグラゴニスには守備貫通を持っている。いっけー!!」
「な、なんだって!!」
ライトロード・ドラゴン　グラゴニス対クラッキング・ドラゴン
攻撃力５５００－０＝５５００
残りライフ７０００↓１５００
「ターン終了時デッキの上から3枚を墓地に送る。これによりジャスティスワールドの効果で攻撃力が上がるよ。」
墓地に送られたカード
光の援軍

ライトロード・ハンター　ライコウ
カオス・ネクロマンサー
ジャスティスワールド
シャインカウンター
6→7

「ぼ、僕のターンドローカードを2枚伏せてターンエンド。」
「私のターンドロー魔法カードハーピィの羽箒発動。相手の場の魔法　罠ゾーンのカードをすべて破壊するね。」
「……」
バトルフェイズ
「グラゴニスでクラッキング・ドラゴンを攻撃!!
「……」
ライフ0
デュエルが終わり、
「ありがとうございました。」
「すごかったですね。特に攻撃力が。」

「ライトロードの殺意が改めてわかったよ。」
「いえいえ、あれでも殺意高くできるよ。今はラッシュデュエル用の為の調整いますからね。」
「え？（あれで調整中なの!?）すごくね。」
「い、いえいえ私なんてまだまだですよ。」
そのまま遊光が来るまでデッキの構成の話を続けていたのだった。

習得せよ儀式召喚!!サイバースマジシャン登場!!

「うーんこれどうしようかな。」
「何のカード見てるのよドラゴン族?」
「いや、これだよ。」
　見せてきたのはサイバース・ウィザードが儀式モンスターとなった姿サイバース・マジシャンだ。
「儀式モンスター?」
「あぁ、今日の授業で儀式モンスターについての講座があってその後実際に儀式モンスターをデッキに入れた実技があるって言うから今日はこれともう一枚儀式モンスターとサイバネット・リチューアルを持ってきたんだよ。」
「あーそんな話あったね。」
「お前まさか忘れたのか?」
「いや、私常にお守り代わりに持ってきているカードがあるから大丈夫。」
「……」
　なお、一人だけこの会話になってから顔が青ざめているのが一人いた。

「あれ、まさか儀式モンスター忘れた？」
「う、うん」
「あれ？じゃあどうすんの？午後の実技だめじゃん。」
「いや、確か購買で儀式確定のパックが売ってたから問題ないと思う。」
「あ、そうなの？良かった。」
なぉ昼にそのパックを買うとハングリーバーガーとそれに関するカードが入って軽く絶望した達也なのだった。

「おーいこれからＯＣＧのカードを使ったデッキ構築の仕方についての講義です。今回は儀式召喚についてだ。儀式召喚は普通、儀式魔法と儀式モンスターそれと儀式素材がいないと使うことが出来ない。なのでＯＣＧではあまり使われていないけどラッシュデュエルでは手札のリソースが増えることで使いやすくなってラッシュデュエルでは活躍出来ると考えられている。それを踏まえ手それぞれグループになって考えをまとめろ」

「「はーい。」」
「サイバース族のデッキたど一応儀式はいるけどあんまりラッシュのルールだと強いとは言えないんだよな。」
「あぁ、リンクモンスターのサポートが多いからね。」
「ドラゴンデッキだとレッドアイズ、ブルーアイズ、ギャラクシーアイズ、の戦士版の儀式モンスターとかいるけど普通に入らないんだよな。」
「カオスＭＡＸとか青眼の混沌龍とかは？」
「確かにデッキに入られるけどそれだとドラゴンデッキじゃなくてブルーアイズデッキになってしまうわ。」
「別にドラゴン族デッキに変わりは無いんじゃないか？」
「違うわ!!ドラゴンといってもそれは種族デッキじゃなくてブルーアイズという名前をのデッキよ!!」
「お、おう。」
　どうやら地雷を踏んでしまったようだ。
　これは話題を変えないと、
「そ、そう言えば、機械族ってあんまり儀式ってイメージ無いんだけどなんかいんのか？」

「確かに機械族の儀式はあんまりないんだよな。ただ、専用構築にしないといけなくて今使っているデッキとは相性良くないんだよね。」
「話題変えようとしてるんじゃないわよ。」
「(あ、終わった。)」
　結局その時間は周りを巻き込み種族デッキとテーマデッキについての論争となり、儀式についての授業をあまりできずに授業が終わった。

「で?結局そっちはどうすんだよ。儀式入れなきゃだろ。」
「とりあえずカオス・フォームと高等儀式術を入れてやってみる。」
「じゃあ俺もサイバースの儀式入れていくわ。」
　デッキを軽くいじってそのまま会場に向かうと一人の女子生徒がいた。
「あらあなたが対戦相手かしら。私は柏木　直美(かしわぎ　なおみ)よろしく。」
「よろしく。」
「俺のターンドロー、俺はサイバース・ウィザード、ドラゴネットを召喚。そしてドラゴネットの効果デッキからデジトロンを守備表示で特殊召喚、そしてカードを2枚伏せてターンエンド。」

サイバース・ウィザード
攻撃力１８００
ドラゴネット
攻撃力１４００
デジトロン
守備力０
「手札から魔法カードエンド・オブ・ザ・ワールドを発動。」
「いきなりぶっ壊れカード来た!!」
「手札の終焉の王デミスをリリースして破滅の女神ルイン儀式召喚時。」
フィールドに現れた魔法陣の中にデミスが入っていき中から美女ルインが現れた。
バトルフェイズ
「ルインでサイバース・マジシャンを攻撃。」
「リバースカードオープン、サイバネット・バックドアを発動。フィールドのサイバース・ウィザードをゲームから除外その後デッキからその攻撃力以下のモンスターを手札に加える。俺はロックアウトガードナーを手札に。そしてサイバース・ウィザードは次の俺のスタンバイフェイズにフィールドに戻ってくる。」
「逃げられましたか。ならルインでドラゴネットを攻撃。」

ドラゴネット破壊。
破滅の女神　ルイン　ドラゴネット
攻撃力２３００－１４００＝９００ダメージ
８０００－９００＝７１００
「更にルインの効果でもう一度今度はビットロンを、破壊。」
ビットロン破壊
「更にルインでプレイヤーにダイレクトアタック。」
「俺は手札のロックアウトガードナーの効果発動このカードを攻撃表示特殊召喚して攻撃対象をこのカードに変更する。」
破滅の女神　ルイン　対　ロックアウトガードナー
攻撃力２３００－１０００＝１３００ダメージ
７１００－１３００＝５８００
「そしてこのターンロックアウトガードナーは破壊されない。」
「それでは攻撃することが出来ないわね。ターンエンド。」
「俺のターンドロー!!スタンバイフェイズ、サイバース・ウィザードが俺の元に戻る。そして俺はライドロンを召喚ライドロンとロックアウトーガードナーを生贄にギャラク

シーアイズをアドバンス召喚。」
ギャラクシーアイズ
攻撃力３０００
「!!来ましたかあなたのエースモンスター。」
「カードを３枚伏せてバトル、ギャラクシーアイズでルインを攻撃。」
「トラップ発動。次元誘爆ギャラクシーアイズを除外。」
ギャラクシーアイズの攻撃しようとするとそのまま粒子となって消えてしまった。
「俺の切り札が、……まあいい。サイバネット・バックネットの効果で戻ってきたサイバース・ウィザードはこのターン相手プレイヤーに直接攻撃出来るそのまま攻撃。」
「くっ。」
攻撃力１８００ダメージ
８０００－１８００＝６２００
「ターンエンド。」
「私のターンドロー手札からＧ戦隊シャインブラックを２体召喚。そのまま装備魔法デーモンの斧をルインに装備してバトル。」
Ｇ戦隊シャインブラック
攻撃力２０００

ルイン
攻撃力２３００→３３００
「リバースカードオープン威嚇する咆哮このターン攻撃出来ない。」
「攻撃出来ないとは、……ターンエンド。」
「俺のターンドロー、俺は伏せてあったサイバネット・リチューアルを発動。フィールドのサイバース・マジシャンと手札のデッコンバードを素材に儀式召喚。電脳世界を守護する魔道士よ、その本来の力を解き放て。いでよ、サイバース・マジシャン!!」
サイバース・ウィザードが進化した姿が現れた。
「更に俺は斬機　アディオンの効果サイバース・マジシャンの攻撃力を１０００上げて自身を特殊召喚。」
斬機　アディオン
攻撃　１０００
サイバースマジシャン
攻撃力２５００　→３５００
「更に斬機　サブトラの効果相手のルインを対象に発動ルインの攻撃力を１０００下げてサブトラを特殊召喚」
斬機　サブトラ

攻撃　１０００
破滅の女神　ルイン
攻撃力３３００↓２３００
「そして斬機２体リリースして手札からスレッショルド・ボークをアドバンス召喚。スレッショルド・ボークの効果で相手の場のモンスターの攻撃力は全て５００下げる。」
スレッショルド・ボーク
攻撃力２４００
破滅の女神　ルイン
攻撃力２３００↓１８００
Ｇ戦隊シャインブラック
攻撃力２０００↓１５００
２体の斬機を生贄にして、巨大なアンドロイドが現れた。
「バトル、サイバースマジシャンでルインを攻撃。」
サイバース・マジシャン対　破滅の女神　ルイン
攻撃力３５００－１８００＝１７００ダメージ
６４００－１７００＝４７００
「スレッショルド・ボークでシャインブラックで攻撃。」

スレッショルド・ボーク　対　シャインブラック
攻撃力２４００－１５００＝９００ダメージ
４７００－９００＝３８００

「ですか、まだ私のライフは残っています。」
「くっ、ターンエンド。」

「私のターンドローエンド・オブ・ザ・ワールド発動。手札から破滅の女神ルインを墓地に送り終焉の王　デミスを儀式召喚そうして効果発動ライフを２０００払いこのカード以外の場のカード全て破壊する。」
残りライフ１８００
終焉の王　デミス
攻撃力２３００
先程のルインと同じように儀式召喚でデミスが現れた。
そのままデミスのエネルギーでフィールドを全て破壊した。
「くっ、だけどサイバース・マジシャンの効果このカードが効果でフィールドを離れた時デッキからサイバース族を１枚手札に加えることが出来る。俺はサイバース・ウィザー

ドを手札に加える。」
「バトル、デミスでダイレクトアタック。」
終焉の王　デミス
攻撃力２３００
２３００
「くっ、」
「行きなさいデミスプレイヤーにダイレクトアタック。」
デミス
攻撃力２３００
２３００のダメージ
４７００−２３００＝２４００

「俺のターンドロー!!来たか、俺は墓地のサイバネット・リチューアルの効果墓地のサイバース・マジシャンとこのカードを除外してサイバース・トークンを２体特殊召喚!!」
サイバース・トークン

「そして俺は魔法カード、魔法石の軌跡手札を２枚捨ててデッキから魔法カード１枚を

手札に加える俺が手札に加えるのは儀式の下準備。」
「!!」
「そのまま発動デッキからサイバネット・リチューアルとを手札にくわえてそのまま発動フィールドのトークン2体を生贄にを嵐竜の聖騎士を儀式召喚。更にサイバース・ウィザードを召喚。」
サイバース・ウィザード
攻撃力１８００
嵐竜の聖騎士
攻撃力１９００
「バトル!!嵐竜の聖騎士で攻撃ダメステ開始時嵐竜の聖騎士の効果発動。終焉の王　デミスを手札に戻す。」
「なんだって。」
嵐竜の聖騎士が起こした嵐がデミスを襲いデミスが手札に戻った。
「これでモンスターはいない。サイバース・ウィザードでダイレクトアタック!!」
「参りましたわ。」
残りライフ０
勝者　佐藤　遊光

「負けましたわ。お強いんですね。」
「いや、そういうわけじゃないよ。ただ単に運が良かっただけだよ。（あっぶねー。やばすぎだろ。デミスドーザー、手札に加わったのが1枚でも違ったら普通に死んでたぞ。）」
「そうですね。今度は本気でやり合いましょう。」
「……はい。」
　知ってたよ。気づいてましたよ。まだあれが残っていることに。むしろ何で古い方だけであんな強いんだよ。
「ん？あれは一体？」
「え？あれは!!」
　別の決闘場でそこではクラッキングドラゴンを具材にしたハンバーガーが現れた。
「行け！ハングリーバーガープレイヤーにダイレクトアタック!!クラッキングバーガー!!」
「ギャアー!!」
　ライフ0
「どうだー!!これが僕の実力だー!!」
　そこにはひどく荒れた感じの達也がクラッキングバーガー（クラッキング・ドラゴン

を素材にしたハングリーバーガーで相手を倒していた。）
「あ、あれが伝説のクッキング流すげぇ初めて見た。」
「クラッキングバーガーは飯なのか？それとも機械なのか？」
「それは今は関係なくない。」
「なんかすごいな。」
「そうですわね。」
　達也が行ったクッキング流風のデュエルに他のデュエリスト達が驚いたのだった。

デュエル・アカデミア　伝説の巨人

「俺はこれでターンエンド。これでフィールドはお前だけ空だ。」
　ここは夜の町でデュエルをしている片方のフィールドにはダーク・アームド・ドラゴンがいてもう片方にはフィールドには何もない
「それはどうかな。俺のターンドロー!!俺は手札の3枚のカードを使ってこのカードを出す。現われろ!!」
　謎の男が手札から3体のモンスターが現れたそれらが合体して1体のモンスターになった。
「これは!?まさかマキシマムなのか?」
「行け!!……ダーク・アームド・ドラゴンを攻撃!!」
「う、うわぁー!!」
　ライフ0

「「マキシマムモンスター？」」

学校昼休み遊光は達也と京子にデュエル・アカデミアで流行っている噂を、話していた。

「そうなんだよ。噂じゃＯＣＧ用のマキシマムカードがすでに流通していてそれを使ってデュエルしている奴がいるらしいんだよ。」

「？ラッシュデュエルだとあるけどＯＣＧのなんて聞いたこと無いし、学校でそう言う話も無いから学校じゃ使えなくない？」

「噂じゃ一部のデュエルディスクで使えるようになってるらしいんだよ。」

「まじか。」

「じゃあ今からカードショップに行って探しに行くか。」

「そうしよう。」

「ちょっと待った。」

二人がカードショップに行こうとしたので掴んだ。

「なんだよ。なんで止めるんだよ。」
「そうだよ。速く行かないと。」
「その前に午後の授業受けないと。」
「「あ。」」

　それからしばらくして放課後。
「よっしゃー!!じゃあマキシマム探しに行くぞー!」
「おーう。」
「ちょっと待ちなさいよ。」
「(マキシマム、まさかもう情報が?)」

「あ、柏木さんお疲れ様です。」
「よお、珍しいカードを使ってるのが地下のデュエルルームでデュエルしているぞ。」
「本当ですか。先にそっち見てこようぜ。」
「あ、待ってよ。」
「あれかってあれは!!」

そこにいたのはちょうどデュエルをしていた。
しかしすでに終盤のようだ。
場には巨大なモンスターのようだ。
「やれ俺の切り札でプレイヤーにダイレクトアタック!!」

「ぎゃあーー!!」
ライフ0

「今のってもしかしてマキシマムモンスターか?」
「まさか。」
「聞いてみよう。」
「やぁいま大丈夫かい?」
「!!」
いきなり後ろから話しかけられ後ろを向くと先程まで授業をしていた先生がいた。
「え? 何故あなたが?」
「いやー、君達がマキシマムがどうとか言っていたのが気になってね。追ってきてしまったんだよ。」

「それで必要がないとは？」
「それはね。「先生早くしませんか？」！あぁ。すまない。今行くよ。」
「先生今のは？」
「あれ？あったことないか？３組の河野　大地（こうの　だいち）だよ。今日ここでデュエルする約束をしていたんだよ。」
「あ、そうなんですか。」
「失礼しました。」
　そのまま先生が決闘場へと向かって行った。
「遅いですよ。先生。」
「すまない。それでは始めようか。」

「「デュエル!!」」
　先生
　ライフ８０００
　河野
　ライフ８０００
「私のターンドロー私は、古代の機械兵士（アンティークギアソルジャー）を２体召喚。

そして2体をリリースして古代の機械巨人（アンティークギアゴーレム）を召喚。カードを1枚伏せて、ターンエンド。」

古代の機械巨人

攻撃力３０００

「あ、古代の機械巨人!!」

「あれってデュエル・アカデミアの教頭以上の先生に使用許可が出ていない伝説のカードじゃねぇか。」

現れたのは機械仕掛けの巨人伝説のモンスターの1体だ。

「伝説のモンスターだとしても俺の目的の為に倒してみせる。俺のターンドロー、カードを1枚伏せて手札から魔法カード手札抹殺お互いの手札を全て捨てて同じ枚数ドローする。俺は3枚先生は1枚捨ててドローだ。そして伏せていた魔法カード通常モンスターを2枚手札に加える。俺は墓地にある磁石の戦士ａ、磁石の戦士ｂを手札に加える。そして、いでよ俺の切り札。!!」

「!!」

「手札の3枚のマグネットモンスターａ，ｂ，ｙを墓地に送り、現われろ磁石の戦士マグネット・バルキリオン」

磁石の戦士　マグネット・バルキリオン

攻撃力３５００
「バルキリオン!?」
「マキシマムじゃなかったのか。」
「マキシマム？何の話だ？」
「え。あ、いえ、何でもないです。」
「バトルだ。行け!!バルキリオン古いガラクタをぶっ壊せ。」
バルきリオン　対　古代の機械巨人
攻撃力３５００－３０００＝５００
５００のダメージ
残りライフ７５００
「ターンエンドさぁ、先生の切り札は潰した。後はライフを０にするだけだ。」
「それはどうかな。私のターンドロー魔法カード古代の整備場、墓地の古代の機械巨人を手札に加える。さらにフィールド魔法歯車街（ギアタウン）を発動。このカードがフィールドにあると古代の機械モンスターをアドバンス召喚する際リリースするモンスターを１体少なくできる。更に古代の機械猟犬を召喚。効果で相手に６００のダメージを与える。」
機械仕掛けの犬が現れその咆哮をした。

「くっ、融合が出来ないのにそんなカードを入れてるなんて。」
残りライフ７４００
「あ、でもバーンダメージ与えられてほとんどリリース素材になるな。古代の機械モンスターだな。」
「そのまま古代の機械猟犬をリリース現われろ古代の機械巨人。更に装備魔法古代の機械戦車を古代の機械巨人に装備。これにより古代の機械巨人の攻撃力を６００上げる。」
古代の機械巨人の腕に稼働砲が付き攻撃力が上がった。
古代の機械巨人
攻撃力３０００→３６００
「攻撃力がバルゲリオンを超えた!?」
「カードを１枚伏せてバトル、古代の機械巨人でバルゲリオンを攻撃。」
「うわぁー!!」
古代の機械巨人対バルキリオン
攻撃力３６００－３５００＝１００
残りライフ７４００－１００＝７３００
「私はこれでターンエンド。」

「俺のターンドロー、俺は手札から魔法カードマグネット・リバースを発動。墓地のマグネット・バルキリオンを復活させる。」
粉々になっていたマグネット・モンスター
磁石の戦士　マグネット・バルキリオン
攻撃力３５００
「あれだけ苦労して倒したバルキリオンが1枚で復活するなんて。」
「更に俺はトラップカード、マグネット・コンバーションを発動墓地から3枚のマグネットモンスターを手札に加え、そのままリリースして現われろマグネットバルキリオンをもう一体特殊召喚。」
「2体目のバルキリオンだと!?」
「だけど攻撃力は古代の機械兵士の方が上だ。」
「更に装備魔法デーモンの斧をマグネット・バルキリオンに装備。」
マグネット・バルキリオン
攻撃力３５００→４５００
マグネット・バルキリオンにデーモンの斧が持った。
「バトル、やれマグネット・バルキリオンで古代の機械巨人を攻撃。」

「トラップ発動。競闘　クロス・ディメンション私の場の古代の機械巨人を除外。」
古代の機械巨人の下に穴が空きそのまま落ちていった。
「何!?」
「先生!!除外してしまうと死にますけど!?」
「古代の機械巨人がフィールドから離れたことで装備魔法古代の機械戦車が破壊されたことで効果発動。相手に６００のダメージを与える。」
「ぐはぁ。」
残りライフ７３００－６００＝６７００
「こんな形で勝利を譲ってくれるとはね。やれバルキリオンを攻撃。」
「くっ。」
「トラップ発動古代の機械蘇生、フィールドのモンスターがいない時、墓地の古代の機械兵士を守備表示で蘇生。」
古代の機械兵士
守備力１３００
墓地から古代の機械兵士が復活した。
「たとえこのターン決められなくても次のターンで決めて見せる。バルキリオンで古代

の機械兵士を攻撃。」

マグネット・バルキリオン対古代の機械兵士

破壊。

「だからか。」

「私のターンドローそしてスタンバイフェイズにクロス・ディメンションの効果で私のフィールドに古代の機械巨人が攻撃力倍の状態で現れる。」

地面に落ちていたアンティークギアゴーレムが2倍の大きさとなって現れた。

古代の機械巨人

攻撃力３０００→６０００

「そんなことが。」

「そして私は速攻魔法リミッター解除を発動。場の機械族の攻撃力を2倍にする。これにより古代の機械巨人の攻撃力が更に2倍となる。」

古代の機械巨人

攻撃力６０００→１２０００

場にいた古代の機械巨人が更に2倍となった。

「攻撃力１２０００の古代の機械巨人だと!!」

「バトルだ!!古代の機械巨人でマグネットバルキリオンを攻撃。」
古代の機械巨人対マグネット・バルキリオン
攻撃力１２０００－３４５０＝８５５０
残りライフ０
「くっ、くっそーー!!強いな古代の機械巨人流石伝説のモンスター。」
「召喚制限はありますが、強力なモンスターですね。」
「やっぱりマキシマムは噂の産物だよな。」
「マキシマムモンスター?どういうことだ?」
「えっとそれは。」
遊光はマキシマムの噂の話をした。
「その噂は聞いたことがあるぞ。上のほうが調整しているらしいという噂だったな。だけど本当の話だとしてもまだまだ実装には時間がかかるみたいだぞ。」
「河野も言っていますし、実際どうなんですか?先生。」
遊光は噂が本当か、どうか先生に確認してみた。
「実は近々マキシマムカードを実装しようと言う話になっているんですよね。あ、これ私に聞いたって誰にも言わないでくださいね。」
「本当ですか?」

「それはもちろん。」
「よし、機械儀式ほぼ無いから来てくれないかなーって期待してたんですよ。」
「何よ。マキシマムといえばドラゴン族もあるんだから期待するわよ。」
「なんだよ。最初のマキシマムはサイバース族使いが使ったんだぞ。つまりこの中じゃ俺が使うね。」
「そんなの分かんないじゃない。」
　それから楽しそうにマキシマムについての話に夢中になる遊光達その横でとんでもないことを言っている先生に気づかないのであった。
「そのマキシマムカードがやばいことに盗まれているということは黙っていたほうが良さそうですね。」

弱さは罪!?奪われたカードを奪還せよ!!

「いやーマキシマムカードは実装されるって話だったけど……全くあの後から音沙汰ないな。」
「まだ調整の最中何じゃないの？あれってかなりのパワーを持ってるし。」
「再現されるのに時間がかかるんじゃないのか？」
　遊光達いつものカードショップでそんな話をしていた。
「中止になったんじゃないの？」
「さすがにそれは無いだろ。」

「返してよ僕のカード返してよ!!」
「いーや、これは俺のカードだ。さっきのデュエルで俺が勝ったんだから俺のものだ。」
「そんなの無茶苦茶だよ。」
　中学生ぐらいの子供がヤンキーと言い争っていた。
「今時あんな奴がまだいたのかよ。」
「あれ少しマナー違反だよね。」

達也と京子は無視するきだったのだか一人向かっていったものがいた。
「だったらデュエルで取り返せばいい。」
「!!」
「あ、遊光さん」
「久しぶりだな、リク。」
「あいつ何やってんのよ。」
「ハハハ、さすがていうか知り合いならそりゃあ止めるか。」
「は、誰だかしらねぇがいいアイデアじゃねえかそれなら早速俺とデュエルを」
「ちょっと時間をもらえないか？」
「え？なんでだよ。はやくやろうぜ。」
「デッキ診断だよお前だって弱いやつとやっても面白くないだろ。」
「は、おもしれえ少し待ってやるよ。今からデュエル場の申請出してくるからそれまでに完成させろよな。」
そう言って受付に向かっていった。
「あ、あの遊光さん僕あいつに勝てる気がしないんだけど。」
「ああ大丈夫だ、あんな奴お前のあれがあれば一発だろ。」
「あのーそれが、いつものデッキの切り札がーそのー奪われちゃったんですよ。」

「……（マジか）だ、だったら余計にデッキをみなをしてあいつより強くなればいいじゃないか。」
「!!そうだよねそうするよ。」
「俺たちも協力するからさ。」
「おれたち？」
「なんで私たちまで巻き込むのよ」
「まあどうせひまだからいいけどさ。」
「これは？」
「……やっぱりか。こいつらだけか。」
「ええ。」
「ええとこれは、」
「こいつのデッキはＨＥＲＯデッキなんだよ。」
「なるほどＨＥＲＯデッキかしかもかなり古いカードが多いな。」
「でもＨＥＲＯは強力なカードが多い例えばエアーマンはターン規制がないから召喚権が無限にあるラッシュデュエルのルールだとサーチし放題だしな。」
「それをいうなら融合サポートを受けられるんじゃないか？」
「いや古いカードなら名称指定サポートが受けられるんじゃないか。」

そう言って、デッキを新しくしていった。
「こんなもんだろ。さあてこれで完成だ。勝って来いよ。」
「うん。」
そう言ってデュエル場えと向かった。
「返してもらいますよ僕のカード。」
「後悔すんじゃねえぞ。」
「「デュエル!!」」
リク
ライフ８０００
ヤンキー
ライフ８０００

「僕のターンドロー僕は手札からフェザーマンとバーストレディを召喚。」
フィールドに現れたのは紅一点（違うけど）の戦士と緑を基調としたＨＥＲＯが現れた。
Ｅ－ＨＥＲＯ　フェザーマン
攻撃力　１０００

Ｅ―ＨＥＲＯ　バーストレディ
攻撃力　１２００
「これが僕の懐かしのヒーロー達だ。」
「僕は場の二体のヒーローを生贄に来い!!エッジマン!!」
Ｅ―ＨＥＲＯ　エッジマン
攻撃力　２６００
「僕は更にカードを２枚伏せてターンエンド。」
「俺のターンドローカードはなこう使うんだよ。俺は手札のバルバロス、ガンナードラゴン、ｓｉｎサイバー・エンド・ドラゴンを捨てて来い、モンタージュ・ドラゴン」
巨大なドラゴンが現れた。
「モンタージュドラゴンはな特殊召喚する時に使ったモンスターのレベル×３００攻撃力が上がるよって今の攻撃力は」
「ということはバルバロスがレベル８、ガンナードラゴンがレベル７、ｓｉｎサイバー・ドラゴンがレベル１０でレベルの合計は」
「２５!!」
モンタージュ・ドラゴン
攻撃力７５００

「見たか。これが最強のモンスターなんだよ。更に装備魔法、デーモンの斧を装備更に攻撃力を、１０００上げる。」
　モンタージュドラゴン
　攻撃力７５００→８５００
「バトル!!モンタージュドラゴンでエッジマンを攻撃!!」
　モンタージュドラゴン対エッジマン
　攻撃力　８５００　－２３００＝６２００
「うわぁー!!」
「俺はこれでターンエンドさっさとあきらめな。」
「僕のターンドロー僕は魔法カード戦士の生還を発動。墓地のフェザーマンを手札にくわえてそのまま召喚。更にモノマネンドを召喚効果でモンタージュドラゴンと攻撃力を同じにする。」
「何?!」
　ものマネ幻想師
　攻撃力０→８５００
　バトル
「モノマネンドでモンタージュと相討ち。」

お互い破壊。
「更にフェザーマンでプレイヤーを攻撃。フェザーウインド!!」
「くっ、」
１０００のダメージ
残りライフ７０００

「俺のターンドロー俺は魔法カード死者転生手札を1枚捨ててモンタージュを回収する。（これでモンタージュを回収すれば俺の勝ちだ。）」
「カウンター罠フェザーショットその発動を無効にする。」
「な!!それはフェザーマンがいないと使えないとんでもんないカウンタートラップじゃねぇか。なんでもないかーどじゃねぇか。」
「まだだ俺はガンナードラゴンを召喚。更にゴースを召喚。更にこの2体をリリースしてバルバロスをアドバンス召喚。」
バルバロス
攻撃力３０００
「バトル、バルバロスでフェザーマンを攻撃。」

「トラップ発動ヒーローバリア、攻撃を無効にするよ。」
フェザーマンを守るバリアが張られて攻撃を守った。
「これでターンエンド。」
「僕のターンドロー僕はＥＨＥＲＯバーストレディを召喚。そしてこの２体をリリースして来いネオス!!」
「そして僕はフィールド魔法ネオスペースを発動ネオスの攻撃力を５００上げる。更に魔法カードヒートハート攻撃力を更に５００上げる。」
「バトルネオスでバルバロスを攻撃!!」
ネオス対バルバロス
攻撃力　３５００−３０００＝５００
５００のダメージ
残りライフ６５００
「僕はこれでターンエンド。」

「もう容赦しねぇ俺のターンドローギャハハハこれで俺の勝ちだ。俺は魔法カード死者蘇生を発動!!これで墓地からバルバロスを蘇生。更に手札から青眼の白竜を見せて青眼の亜白竜を特殊召喚。」

先ほどから何度も復活しては消えるバルバロスそして伝説のモンスターの亜種が現れた。
「あいつバルバロス好きだな。」
「その分過労死枠になってきたな。」
「ちょっと邪魔するんじゃないの。」
コストにされたり、普通に出てきたりしたバルバロスの復活にさすがに外野も引いていた。
「だまらしゃい更に魔法カードサイクロンそのセットカードを破壊する。」
「リバースカードオープン威嚇する咆哮このターン攻撃は出来ないよ。」
破壊されそうになったカードが直前で発動したことで攻撃することができなくなった。
「だったら青眼の亜白竜の効果発動。攻撃を放棄してネオスを破壊。ターンエンドだ。」
亜白竜の口からエネルギーを放ったことでネオスを破壊された。
「僕は手札からOオーバーソウルを発動墓地のネオスを特殊召喚する。」
バルバロスと同じ
「装備魔法ネオスフォースネオスの攻撃力を８００上げる。」
ネオスの拳にエネルギーが溜まっていく。

ＥＨＥＲＯ　ネオス
攻撃力２５００→３０００→３８００
「そして装備魔法　フェバリットヒーローをネオスの攻撃力を守備力分アップさせる」
「な、なんだよそのカードは」
「お前を倒すために店長が用意してくれたんだ。」
「な、なんだよそれ!?」
ネオスにさらにエネルギーが増加した。
ネオス
攻撃力３８００→６３００
「こ、攻撃力６３００だと!?」
「これがヒーローの力だ。バトル、ネオスで亜白竜を攻撃。」
ネオス対亜白竜
攻撃力６３００－３０００＝３３００
３３００のダメージ
残りライフ６５００－３３００＝３２００
「まだ俺のライフは残っているぞ」

残りライフ
「いや、まだだよ。僕は更にフェイバリットヒーローの効果このカードを墓地に送り装備モンスターはもう一度攻撃出来る。もう一度今度はバルバロスだ。」
ネオス
攻撃力６３００→３３００
「まだそれでもライフは「手札のオネストの効果発動。」……なんでそのカード入ってんだよ!!」
「ネオスが入ってるんで。」
「それで納得してしまったー!!」
ネオスに鳥のような翼が現れネオスの攻撃力がさらに上昇した。
ネオス
攻撃力３３００→５８００
ネオス対バルバロス
５８００－３０００＝２８００ダメージ
残りライフ０
「負けた、この俺が、」

「さあお前が今まで奪ってきたカードを持ち主に返してこい。」
「勝者には従う。それが俺のルールだ。ほらよ。」
「ありがとう。それじゃあ僕はこれで。」
カードを返してもらってそのまま帰っていった。
「俺たちも帰ろうか。」
「そうだな。」
「私も帰るわ。」

誰もいないとある薄暗い部屋
「ははは、これで条件は整った。このカードとこれを使ってこれで最強の力が手に入る。」
そこには悪魔のようなカードと戦士のカードと二体が融合したようなカードがそこにはあった。